

# 英国図書館研修報告

やまだ まや  
山田 摩耶

(三田メディアセンター)

## 1 はじめに

2012年9月から12月までの3ヶ月間、英国イングランド東部ノリッジにある、セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書室（以下、SISJAC）を拠点として、英国内に存在する日本語資料を所蔵している、複数の大学図書館、大英図書館での研修の機会が与えられた。専門図書館、大学図書館、国立図書館とその規模やサービス対象者などは様々だが、以下の訪問先図書館での業務体験や見学を通して見えてきた、日本語資料の管理、研究学習支援の実態と、英国の図書館のサービスの動向について簡単に報告したい。

### (1) セインズベリー日本藝術研究所の概要

中世に栄え、美しい町並みそのまま残されたノリッジ市の中心にそびえるノリッジ大聖堂。その敷地内に静かにたたずむセインズベリー日本藝術研究所は、1999年に海外での日本の芸術、文化への理解と研究の普及を推進する目的で、ロバート・セインズベリー夫妻の資金援助のもと設立された研究所である。日本の美術、考古学、視覚メディア分野を柱とした研究活動を支援すべく、英国内のロンドン大学 SOAS 図書館（以下、SOAS）、イーストアングリア大学図書館（以下、UEA）、大英博物館や、海外、日本の様々な学術機関、財団との連携のもと、フェローシップ制度、講演会、国際ワークショップ、研究成果の出版などの活動が活発に行われている。

図書館はそれらの研究支援を目的に、2003年に設立され、今年で10年を迎える。後述するコートツィコレクションのほか、陶芸家バーナード・リーチ氏や美術史研究者の松下隆章氏、柳澤孝氏の旧蔵書を中心に、展覧会カタログや発掘調査報告書なども含め、多くの機関からの寄贈資料が蔵書の中心を構成している。

設立から10数年が経ち、この研究所を広く知ってもらうための広報活動も積極的に行われ、昨年よりウェブサイトでもメールマガジン<sup>1)</sup>の掲載を開始した。メールマガジンでは、講演会、ワークショップなどの開催情報、活動報告のほか、日本の習慣や文化の

紹介、日本の美術館の紹介も行われている。また、SISJACのフェローシップ制度を経験した研究員へのインタビューを通じて、研究者たちの現在の研究活動を発信することで広報支援を行っている。図書室からは“Treasures of the Library”と称して蔵書が紹介されている。これまでに、SISJACのユニークコレクションの一つでもあり、元駐日英国大使で日本学研究者のヒュー・コートツィ脚から寄贈された、日本を描いた海外の古地図や、16世紀に刊行された貴重書などが紹介されている。

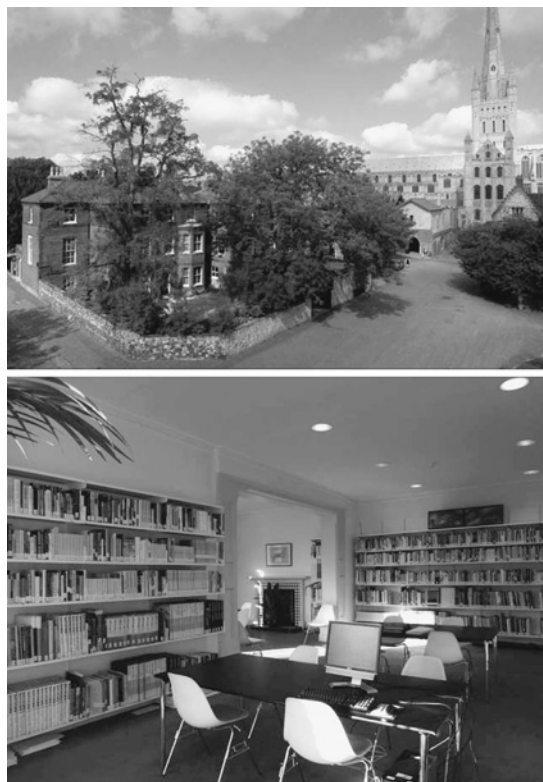


図1. SISJACの全景と図書室室内

筆者の今回のSISJAC滞在は、SISJACにとっては日本からの大学図書館員の受入れ、本学にとっては海外での図書館員研修の拡充、という双方のニーズがマッチしたことで実現した。

### (2) その他の訪問先図書館

大英図書館（以下、BL）、オックスフォード大学ボードリアン図書館附属日本研究図書館、ケンブ

リッジ大学図書館(以下、ケンブリッジ)、SOAS、UEA、ロバートセイズベリー図書館、大英博物館日本セクション図書室、国際交流基金ロンドン日本文化センター図書室。その他、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学では附属の学部図書館等を複数見学した。

## 2 英国における日本図書館の業務

### (1) 概要

訪問先の日本図書館員は1名から4名程度のスタッフ数で日本語資料の管理業務を行っている。蔵書数も、少ないところで4万冊から、多いところで14万冊ほどあり、一部の図書館では日本語資料だけでなく韓国語資料の管理も日本図書館員が取り扱っている。英国でも北米と同様、図書館内の人事異動はほとんどなく、10年以上同じ図書館員が担当しているところが多い。そのためコレクションについて知り尽くしていることもあり、利用者にも細やかに対応したサービスや蔵書構築を行っていると感じた。

海外における日本図書館については、いくつかの文献にも詳しく紹介されているが<sup>2)</sup>、英国では歴史、文学、芸術、政治、経済などを中心とした、従来から行われている人文社会科学研究を主流として、最近では一部の大学でポップカルチャーやメディアの研究も始められている。ノリッジ近郊のUEAでは、古典ではなく現代の日本語、日本文化、メディア学を学ぶことができる日本学専攻を2011年に新設した<sup>3)</sup>。また、SOAS訪問時に日本語資料のオリエンテーション講師を担当させてもらった際には、参加者から日本の映画やスポーツ分野の資料について問い合わせを受けるなど、日本研究の範囲も多様化してきていることを実感した。英国では、近年の大学卒業生の就職難に加え、大学の授業料の大幅値上げの要因もあり、国内で地域研究を行う学生は全体的に減少しているのが現状だが、日本研究者については大きく減っている様子はなく、むしろ増えている大学もあった。

### (2) 収書、選書

そうした多様化する主題範囲の中では、新書も古書も必要とするため、日本の大規模書店だけではなく、どちらも取り扱える海外の日本図書館を中心に営業する小規模書店、古書店と取引している図書館

が多い。海外の場合は、送金手数料がばかにならないこともあり、支払いに関してはまとめ払いに柔軟に対応してくれる点などが取引理由の一つでもあるようだが、このような小規模書店の場合、営業担当者が変わることによってサービスの質が変わってしまい、コンスタントに自館の蔵書分野についての新刊情報を得ることが難しいとの声もあった。見計らいシステムがない中での選書のため、新聞、雑誌に掲載されている書評などの情報源が欠かせないとのことだった。また、限られた予算内での購入になるため、全てを新規購入でまかなうことは難しく、多くの日本図書館では、個人や団体からの寄贈のほか、国立国会図書館で行われている資料の国際交換制度が積極的に活用されている。実際に国際交換される資料は、展覧会カタログ、発掘調査報告書や政府刊行物、大学紀要、東日本大震災関連図書、地方史資料など分野も多岐にわたり、一般の書店では入手しづらい資料も収書されていることに、国際交換制度の利点を実感することができた。中には日本の大学図書館の除籍本を譲り受けている図書館もあった。ただ、書庫狭隘化の問題は、訪問先のいくつかの図書館でも抱えており、書庫管理に頭を悩ませている。日本と比べ、もともと日本語資料の入手が困難であることや、寄贈資料も多いだけに、なかなか除籍作業に踏み切れないジレンマもあるようだ。

### (3) 目録

どの日本図書館もAACR2のMARC21フォーマット採用の目録だが、SISJAC、SOASでは、請求記号にNDC分類を付与しているほか、SISJACでは展示カタログの注記表記、発掘調査報告書の分類番号への地域番号の付与など、専門図書館ならではの細やかな目録作成が行われていた。また、ほとんどの図書館で、自館の目録システムへの登録とは別に、Web-UIを使ったNACSIS-CATへの登録を行っている<sup>4)</sup>。以前は全学の総合目録がCJK言語未対応だったため、英国内の日本図書館所蔵資料を横断検索することができる英国和書総合目録(UK Japanese Union Catalogue)<sup>5)</sup>を独自に開発し活用していた。この英国和書総合目録は、英国の日本研究図書館のコミュニティで1966年に設立された、Japan Library Group(以下、JLG)<sup>6)</sup>の共同事業として始まったもので、英国のNACSIS-CAT参加館のデータをNIIより定期的に送付してもらい、ケンブリッジ大

学のサーバーに登録され配信されている。その維持管理に、多くの時間と手間がかかっていたとのことだったが、ようやく昨年より CiNii Books 上での「地域別」「国別」限定の検索が可能になったことで、この目録もその役目を終え、現在では CiNii 検索画面に JLG 参加館の図書館 ID を埋め込んだ形で、CiNii 上で英国全体や、特定の図書館だけに限定して検索できるように工夫されている。また、現在では全館レベルで Unicode が扱える図書館システムが運用されており、OCLC 等からの書誌調達により全学の目録システムにも日本語表記の書誌を登録し、利用者がより簡単に日本語資料を検索できるよう改善している。

#### (4) コミュニティの重要性

JLG では、目録だけではなく、日本語資料の蔵書構築やサービスについての情報共有が活発に行われている。当初 5 館だけだった参加館も現在では 20 館まで増え、春と秋の年 2 回の会合が行われるが、これ以外にも 1989 年設立の日本資料専門家欧州協会 (EAJRS) のコミュニティも存在し、英国に限らず欧州での協力関係も築いている。こうしたコミュニティによるコンソーシアムで日本のデータベースの契約も行われている。主に新聞、辞書 (JapanKnowledge など) や、雑誌記事索引のデータベースを中心に導入されているが、単館での導入はどこも予算の関係で厳しいため、JLG として共同購入しているケースも見受けられた。また、電子資源だけでなく、冊子体の資料も共有される。ある図書館で寄贈図書が重複すると、JLG 参加館に声をかけ冊子体資料を無駄なく活用している。SISJAC に関しては、分野が専門的であるが故、JLG 参加館だけでなく、大英博物館とも連携が行われ、大英博物館日本セクション図書室の目録作成や、所属学芸員からのレファレンス質問の対応を SISJAC の司書が行っている。

#### (5) 日本語資料のデジタル化の必要性

古典籍を数多く所蔵している大学図書館ではデジタル化も進められている。ただ全ての日本の古典籍資料を学内の予算でデジタル化するのは優先順位上難しいため、貴重資料以外は学外機関との協力の上進めている。SISJAC では、日本の古地図、横浜絵などの特色ある古典資料を立命館大学アート・リサーチセンターの協力でデジタル化し一般に公開してい

る。

日本へ ILL を気軽に申し込むことがしづらい海外の日本図書館にとって、国立国会図書館近代デジタルライブラリーや日本国内で所蔵する図書館資料のデジタルアーカイブは非常に役に立つとのこと、日本国内で所蔵している古典籍資料のデジタル化をすすめることによる、海外の日本研究者への貢献の重要性を実感した。

### 3 英国図書館の動き

日本研究図書館に限らず、訪問先の図書館全体を通して見られた、図書館サービスの動向をいくつかの点から紹介したい。

#### (1) 「場としての図書館」を目指した館内

複数の図書館で、ここ数年間にリノベーションが行われ、利用者のニーズにあわせた「場」の再生を目指した動きが見受けられた。カウンターの近いところにガラス張りの透過性のある仕切りを使ったグループ学習室が設置されている大学では (図 2)、室内に設置されたプラズマディスプレイを使って討論している学生の姿など、活発に利用されている様子が見てとれた。現在 5 年をかけて、大規模に改装中のオックスフォード大学ボードリアン図書館ウェストン図書館 (旧 New Bodleian 図書館) でも、グループで使える閲覧席に加え、カフェ、ホール、展示ギャラリー等の設置が検討され「場としての図書館」が重視されていることがうかがえる<sup>7)</sup>。



図 2. UEA のグループ学習室

また、訪問図書館のほとんどの閲覧席で WiFi が

設置されていたほか、UEA などでは、サイレントエリアと指定された、対話や音楽視聴禁止の閲覧席があるなど、個別の閲覧席でも利用のニーズに細やかに合わせた環境が整えられていた。中には、騒音苦情のための専用窓口の電話番号を広報し、図書館内の利用者から連絡を受けると、いち早くスタッフが駆けつけ注意するという図書館まであった。

館内の整備とともに、利用しやすい図書館を目指したさまざまな工夫もされていた。ケンブリッジやBLでは、利用者の導線を考えて館内入口近くにデジタルサイネージを効果的に配置し(図3)、オリエンテーションや展示の開催情報などをスライドショーで表示している。また、利用者のニーズをより把握するため、入口近くの質問しやすい場所にカウンターを設置している。



図3. BL 入口のデジタルサイネージと背後の information desk

このほか、UEA や SOAS では、館内に別々にあった circulation カウンターと IT support のカウンターなど複数のカウンターを統合して、一つのカウンターにまとめるなど、ワンストップサービスの環境を作り上げている。また、モバイル機器を使う利用者のため、配布物や掲示物に掲載する図書館のウェブサイトの案内も、URL 表記ではなく QR コードを使ってその場でアクセスしやすいよう工夫されていた。(図4)

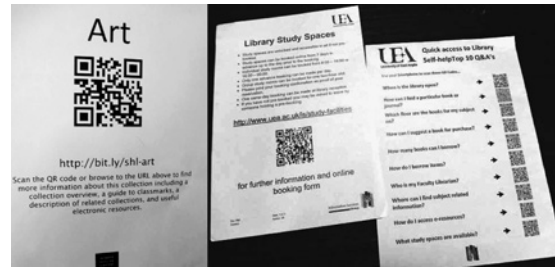


図4. (左) 書架に貼られた、分野別パスファインダーへの案内の掲示(右) 図書館内の配布資料に記載された QR コード

## (2) 資料保存, 特殊コレクションの管理部署の存在

快適な学習, 研究空間の環境整備と同時に、資料保存のための管理体制も充実している様子が見ええた。BL では貴重書の書庫と閲覧室の温度を3度差までに調整し、両空間の行き来による資料へのダメージを軽減している。



図5. 修復作業の映像及び道具の展示 (BL Center for Conservation 室内)

そのBLは勿論のこと、オックスフォード、ケンブリッジなど、貴重な古典籍資料を数多く所蔵している大学図書館では、図書館内に資料保存、修復を担当する部署が存在し、専門的知識を持つスタッフが10名から20名近く担当している。オックスフォードでは日本の文化財修復会社での修行経験があるスタッフもいた。両大学図書館では、日本の和紙が和書だけではなく洋書の修復にも活用されていた。資料の状態により、厚みや種類も様々な和紙が使分けられていて、中には世界一薄いといわれる和紙もあった。規模が違うとはいえ、少なからず貴重な資料を所蔵している三田メディアセンターも、将来的にこのような部署あるいは、専門知識を持つスタッ

フの必要性を感じた。

オックスフォードでは、個々の資料の修理の他、15, 16 世紀出版の古い図書が並ぶ開架書庫の清掃作業を外注業者に頼まず、この部署で開館前に専門器具を使って清掃を行っていた。また、ケンブリッジでは、貴重書ではない通常の雑誌製本やソフトカバーの本のラミネート製本さえも外注せず、自館の製本部署で行う徹底ぶりであり、日本の文庫本までもが綺麗にラミネート製本されており、資料保存への意識の高さを感じることができた。

貴重書をそこまで数多く所蔵していない大学でも、図書館で所蔵するユニークコレクションの整備に力をいれている。UEA のアーカイブ担当では、卒業生の画家、作家や建築家が残した手稿や、大学創立時の文書などを中性紙箱に入れ、温湿度管理が行われた閉庫書庫で管理している。箱単位ではなく文書単位で書誌データを作成し、約 1 万タイトルの全てのコレクションを図書館の Library Catalogue で検索ができるようにしている。これらは一般の利用者、研究者にも公開されているが、より広く特徴的なコレクションを知ってもらうため、アーカイブ担当者がブログで毎週コレクションの資料紹介を行っている<sup>8)</sup>。

### (3) friends (寄付金) 制度による資金調達

オックスフォードや SOAS の大規模なリノベーションの例にみられるように、外部団体からの巨額の寄付を背景とした事業が行われる一方で、個人からの寄付金制度 (Friends) を、訪問先のどの図書館も設けており、図書館主体の資金調達が活発に行われていた。本学でも昨年の図書館開館 100 年を機に寄付金募集を始めたが、訪問先の図書館では、古くは 1925 年から、多くは 1980 年代からの開始と歴史がある。会費も個人だけではなく、2 人単位の割引価格や、学生割引価格などの様々な価格設定がされており、それなりの金額を集めているようだった。集めた寄付金は、貴重書購入や施設整備、修復費用などに充てられている。加入特典としては、各種イベント参加や、外部者には有料の図書利用券の割引などがあげられている。

### (4) 様々な学習、研究支援体制

#### a. Reading list のデジタル化と管理

UEA, ケンブリッジの学部図書館など、いくつかの図書館では、各コースのレジメの参考文献に挙げ

られた Reading list をデジタル化し、コース履修者がアクセスできるように提供されていた。Copyright Licensing Agency (CLA) による著作権管理のもと、教育目的で著作権がクリアになったものに対し、資料の一部について自由なスキニングと公開が許可されている。各コースの始めに Subject Librarian が Reading List を入手し、電子ジャーナルや、冊子体の論文をスキニングしたものをサーバーにアップロードしている図書館もあった。

#### b. テーマ、資料別のインストラクションの設置

三田メディアセンターが行っているような、ゼミ単位でのインストラクションではないが、訪問先図書館のいくつかで地図、楽譜、新聞、貴重書の資料別や、地域別資料、分野別資料の探し方から、アカデミックリーディングやアカデミックライティングの方法まで、細やかに用意されていた。大学によっては、参加対象者が限定されているメニューもあったが、オンライン上から個人での予約申し込みが可能である<sup>9)</sup>。また、驚いたことに BL でも各分野の契約データベースのインストラクションが数多く設けられ、Reader (利用券所持者) は事前予約の上、誰でも参加することができるようになっている。

#### c. 利用者とのコミュニケーション

各大学の Web サイト上には、チャットでの受付体制はないものの、Subject Librarian の名前を出しメールでの問い合わせに対応している。また、オックスフォードや SOAS の日本図書館では、日本語資料を使う専攻の大学院生や新入生に対して、新学期になると個々にメールを送信し、それぞれの研究テーマをきき資料収集について面接を行うなど、積極的に研究のフォローを行っている。UEA では、毎月 1 回の学生主体のミーティングに Faculty Librarian が参加し、30 分から 1 時間程度の時間で、図書館への様々な要望をきく場が設けられていた。

大学図書館に限らず、SISJAC でも利用者と積極的に交流できる場が存在し、毎月 1 回の講演会の後には、必ず立食形式のレセプションが設けられている。参加者が講演者や SISJAC のスタッフと気軽に日本文化について語り合えることができ、日本研究の促進、文化の普及のための貴重な機会となっていることがうかがえた。

### (5) デジタル化

どの大学図書館も資料のデジタル化作業を積極的

に進めているが、BLも昨年、BBCからの人材を館長に登用したことで、デジタル化事業に精力的に取り組んでいる。電子媒体資料にかかわる著作権の法改正を見込み「次世代のための資料のアクセスの保証」を今後の戦略にあげ、Google Books Projectでの18世紀資料の大量デジタル化や、カタールプロジェクトなどに代表される外国政府や団体の外部資金により、所蔵している外国語資料のデジタル化作業を随時進めている。また冊子体のデジタル化だけでなく、ウェブサイトの保存を目的としたUK Web Archiveの構築も進めている。

一方で、BLの公的事業・ラーニング部門では、すでにあるデジタル資料を複合させた、英文学の生涯学習用の無料のWebコンテンツ“English Online”を開発中である<sup>10)</sup>。BLが所蔵している、膨大な量の写真や新聞、手稿、音声資料、地図資料などのコレクションに広く興味を持ってもらうため、これらのデジタル資料を組み合わせた、新たな形でのデジタルコンテンツの提供が試みられている。作家の人物情報、作品情報なども、研究者の学術文献へのリンクとともに掲載し、文学作品、作家について多角的に研究できるように工夫されている。

#### 4 終わりに

本学での海外研修は1965年より始まり、80年代半ば以降はほぼ毎年派遣されている<sup>11)12)</sup>。ここ最近では北米図書館の動向について少なからず知り得てきたが、今回久しぶりに欧州地域を代表する英国での研修が始まった。様々な規模の複数の図書館を訪問したことで、現在の英国の図書館サービスの実態、方向性について見えてきた点も多く、非常に有意義な時間を過ごすことができた。資料の保存やアクセスの利便性の点から資料のデジタル化が進むというのは、規模の差こそあれ今の世界の図書館界で共通した流れだと思うが、各図書館の冊子体資料、アーカイブ資料、デジタル資料を含め、今後どのようにして、未来につながる「質の高い」コレクションを構築し、「知」の創造の場をつくりあげるか。利用者のニーズにあった図書館の箱と中身の個性を出した、生きている図書館のあり方を考えさせられる貴重な機会であった。

また、今回は日本図書館を中心に訪問し、日本語資料のインストラクション講師や、カウンターでの

シャドウイング、訪問先の図書館員を交えた研究者たちとのミーティングやレセプション参加などを実務体験したことで、海外での日本研究の需要や、日本語資料の利用実態と、それがどのように日本図書館員によりサポートされているのかを肌で感じる事ができた。同時に、図書館員同士のコミュニティの重要性と、研究者、利用者とのコミュニケーションの大切さを改めて痛感した。今回の英国滞在は、日本国内だけでなく、海外の日本研究者や、それを支援する図書館員たちに、同じ日本語資料を扱う本学の図書館員が持っているスキルやアイデアを、どのようにアウトプットできるかを考える、よい機会となった。本学にとって新たな海外研修の方向性を検討する一歩にできればと思う。

幸いにも、日英交流400年を迎えた今年も第2回目の研修者が続いている。この英国研修が今後も継続するよう願ってやまない。

最後に、この度の研修でお世話になった、筆者の恩師でもある河合正朝名誉教授はじめ、セインズベリー日本藝術研究所の皆様、司書の平野明氏、JLG参加館の訪問先図書館の日本図書館員の皆様方、目録トレーニングを引き受けてくださったメディアセンター本部目録担当、繁忙期の不在をゆるしていただいた三田メディアセンターのスタッフ皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げたい。

#### 注・参考文献

- 1) Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures. “e-magazine”. <http://sainsbury-institute.org/support-us/e-magazine/e-archives/e-magazine-issue-03/>, (accessed 2013-08-10).  
筆者の滞在時のインタビューも掲載されている。
- 2) 江上敏哲. 本棚の中のニッポン：海外の日本図書館と日本研究. 東京, 笠間書院, 2012, p. 296.
- 3) University of East Anglia. “Centre for Japanese Studies”. Centre for Japanese Studies. <http://www.uea.ac.uk/japanese-studies>, (accessed 2013-08-10).
- 4) BLはWeb-UIPではなくNACPCを利用している。
- 5) National Institute of Informatics. “Japanese Union Catalogues Libraries”. Cambridge University Library Japanese Vernacular Catalogue. <http://juclib.cam.ac.uk>, (accessed 2013-08-10).
- 6) The Japan Library Group. “The Japan Library Group”.

海外レポート

- The Japan Library Group (UK). <http://www.jlgweb.org.uk>, (accessed 2013-08-10).
- 7) Bodleian Libraries University of Oxford. "Weston Library (formerly the New Bodleian)". <http://www.bodleian.ox.ac.uk/our-work/estates-projects/weston>, (accessed 2013-08-10).
- 8) UEA library. "tag-the UEA library blog". <http://taguelibrary.wordpress.com/>, (accessed 2013-08-10).
- 9) University of Cambridge. "Cambridge University Library training". <http://training.cam.ac.uk/cul/>, (accessed 2013-08-10).
- 10) British Library. "User research for English Online". <http://www.bl.uk/learning/news/recruitment>, (accessed 2013-08-10).
- 11) 石黒敦子ほか編集・執筆. "第2部 4.図書館職員の海外研修". 慶應義塾図書館史稿一九七〇～二〇一二:開館一〇〇年記念. 東京, 慶應義塾図書館, 2012, p. 166-169.
- 12) 関秀行. 慶應義塾大学メディアセンターにおける「国際化」. 大学図書館研究. 2013, vol. 98, p. 11-18.
- その他, 各訪問先の研修報告については過去のMediaNetの記事を参照されたい.